

## Complexity of Lattice Problems

— A Cryptographic Perspective —

D. Micciancio & S. Goldwasser

### 5 Sphere Packings (球充填)

**問題** 格子点間の最小距離が $\lambda$ 以上であるとき、半径 $\rho$ の $n$ 次元球の内部の格子点の最大可能個数はいくらか。

この問題の答は $\lambda/\rho$ にのみ依存する。

#### (自明な) 事実

- $\lambda/\rho$ が十分大きいとき、定数個の点しか詰め込めない。
  - $\lambda/\rho > 2$ のとき1個。  $\lambda/\rho = 2$ のとき2個。
- $\lim_{n \rightarrow \infty} \lambda/\rho = 0$ のとき、指数的に多くの点が詰め込める。
  - $\lambda/\rho = 2/\sqrt{n}$ のとき、立方格子 $2\mathbb{Z}^n$ について、 $\lambda = 2$ 。中心 $\mathbf{s} = (1, 1, \dots, 1)^T$ 、半径 $\rho = \sqrt{n}$ の球を考える。この球を表す式は、

$$(x_1 - 1)^2 + (x_2 - 1)^2 + \dots + (x_n - 1)^2 = n .$$

したがって、 $2^n$ 個の点 $(2 \pm 2, 2 \pm 2, \dots, 2 \pm 2)^T$ を含む。

- 1より大きいある $\lambda/\rho$ については、 $n$ に応じて増える任意に多くの点を含む。
  - $\{x \mid x \in \mathbb{Z}^n \text{ で } \sum_{i=1}^n x_i \text{ は偶数}\}$ を考える。これは、基底ベクトル $\mathbf{b}_i = \mathbf{e}_1 + \mathbf{e}_i$  ( $i = 1, \dots, n$ )により生成される格子で、 $\lambda = \sqrt{2}$ 。中心 $\mathbf{e}_1$ 、半径 $\rho = 1$ の球を考える。このとき、 $\lambda/\rho = \sqrt{2}$ で、この球には $2n$ 個の点 $\mathbf{e}_1 \pm \mathbf{e}_i$  ( $i = 1, \dots, n$ )が含まれる。

#### 次節以降で示される結果

1.  $\lambda/\rho > \sqrt{2}$ のとき、定数個の点しか詰め込めない。
2.  $\lambda/\rho = \sqrt{2}$ のとき、詰め込める点の最大個数は $2n$ 。
3. 任意の $\lambda/\rho < \sqrt{2}$ について、次元に関して指数的に多くの点が詰め込める。

上の1, 2は格子点でない場合も成立する。

## 5.1 Packing Points in Small Spheres

$\lambda/\rho \geq \sqrt{2}$  の場合について

- 格子点という制約を考えない。(上界なので, 格子点の場合にも成立)
- 一般性を失うことなく,  $\lambda = 2, \rho \leq \sqrt{2}$  と仮定.

**定理 5.1** 任意の  $\rho < \sqrt{2}$  について, 半径  $\rho$  の球に詰め込むことのできる, 互いの最小距離が 2 の点の最大数は  $\lfloor 2/(2 - \rho^2) \rfloor$  である.

**証明**  $\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots, \mathbf{x}_N$  を以下を満たすベクトルの集合とする.

- $\|\mathbf{x}_i\| \leq \rho$
- $i \neq j$  のとき  $\|\mathbf{x}_i - \mathbf{x}_j\| \geq 2$

このとき

$$\begin{aligned} 4N(N-1) &\leq \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N \|\mathbf{x}_i - \mathbf{x}_j\|^2 = \sum_{i=1}^N \sum_{j=1}^N (\|\mathbf{x}_i\|^2 + \|\mathbf{x}_j\|^2 - 2\langle \mathbf{x}_i, \mathbf{x}_j \rangle) \\ &= \sum_{i=1}^N \left( N\|\mathbf{x}_i\|^2 + \sum_{j=1}^N \|\mathbf{x}_j\|^2 - 2\langle \mathbf{x}_i, \sum_{j=1}^N \mathbf{x}_j \rangle \right) \\ &= 2N \sum_{i=1}^N \|\mathbf{x}_i\|^2 - 2 \left\| \sum_{i=1}^N \mathbf{x}_i \right\|^2 \leq 2N^2 \rho^2 \end{aligned}$$

したがって,  $2(N-1) \leq N\rho^2$  で,  $N$  は整数だから, 定理が成り立つ.  $\square$

**定理 5.2** 半径  $\sqrt{2}$  の  $n$  次元球に詰め込むことのできる, 互いの最小距離が 2 以上の点の最大数は  $2n$  である.

**証明**  $n$  に関する帰納法.  $n = 1$  のときは明らか. ある  $n$  について成立を仮定して,  $n+1$  の場合を考える.

$\mathbf{x}_1, \mathbf{x}_2, \dots, \mathbf{x}_N \in \mathbb{R}^{n+1}$  を以下を満たすベクトルの集合とする.

- $\|\mathbf{x}_i\| \leq \sqrt{2}$
- $i \neq j$  のとき  $\|\mathbf{x}_i - \mathbf{x}_j\| \geq 2$

$i \neq j$  のとき,

$$\langle \mathbf{x}_i, \mathbf{x}_j \rangle = \frac{1}{2} (\|\mathbf{x}_i\|^2 + \|\mathbf{x}_j\|^2 - \|\mathbf{x}_i - \mathbf{x}_j\|^2) \leq \frac{1}{2} (2 + 2 - 4) = 0$$

なので, 任意のベクトルの組の間の角度は  $\pi/2$  以上.

$\mathbf{x}_N \neq \mathbf{0}$  に注意して ( $\mathbf{x}_N = \mathbf{0}$  なら, 最小距離が 2 以上とならない),

$$\mathbf{x}'_i = \begin{cases} \langle \mathbf{x}_N, \mathbf{x}_N \rangle \mathbf{x}_i - \langle \mathbf{x}_i, \mathbf{x}_N \rangle \mathbf{x}_N & \text{if } \langle \mathbf{x}_N, \mathbf{x}_N \rangle \mathbf{x}_i \neq \langle \mathbf{x}_i, \mathbf{x}_N \rangle \mathbf{x}_N \\ \mathbf{x}_i & \text{otherwise} \end{cases}$$

を定義し,  $\mathbf{x}''_i = \sqrt{2} \mathbf{x}'_i / \|\mathbf{x}'_i\|$  とする. このとき, 以下が成立することが確認できる.

- $\|\mathbf{x}_i''\| = \sqrt{2}$  かつ,  $i \neq j$  のとき,  $\|\mathbf{x}_i'' - \mathbf{x}_j''\| \geq 2$
- $\mathbf{x}_i'' = \pm \mathbf{x}_N''$  または  $\langle \mathbf{x}_i'', \mathbf{x}_N'' \rangle = 0$

$\mathbf{x}_1'', \dots, \mathbf{x}_N''$  は, 高々2個を除いて,  $\mathbf{x}_N$  と直交する  $n$  次元部分空間に存在するので, 帰納法の仮定より,  $N \leq 2(n+1)$ . □

## 5.2 The Exponential Sphere Packing

$\lambda/\rho < \sqrt{2}$  の場合について

- 任意の  $l_p$  ノルムを仮定 ( $p \geq 1$ )

$$\|\mathbf{x}\|_p = \left( \sum_i |x_i|^p \right)^{1/p}$$

### 5.2.1 The Schnorr-Adleman prime number lattice

**補題 5.3**  $a_1, \dots, a_k$  を互いに素な正の奇数の列とする. 任意の  $l_p$  ノルムと任意の実数  $\alpha > 0$  について,

$$\tilde{\mathbf{L}} = \begin{pmatrix} \sqrt[p]{\ln a_1} & 0 & 0 \\ 0 & \ddots & 0 \\ 0 & 0 & \sqrt[p]{\ln a_k} \\ \alpha \ln a_1 & \cdots & \alpha \ln a_k \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^{(k+1) \times k}$$

の列により生成される格子のすべての非零ベクトルの  $l_p$  ノルムは  $\sqrt[p]{2 \ln \alpha}$  より大きい.

**証明** すべての非零整数ベクトル  $\mathbf{z} \in \mathbb{Z}^k$  について,  $\|\tilde{\mathbf{L}}\mathbf{z}\|_p^p > 2 \ln \alpha$  を示す. 必ずしも自明ではないが, 単に計算による証明なので省略. □

格子の最短ベクトルの長さを大きくする自明な方法は, すべての座標を  $\alpha$  倍すること. 一方,  $\mathcal{L}(\tilde{\mathbf{L}})$  では, 最後の座標のみ  $\alpha$  倍することで長さが大きくできる. ただし,  $\alpha$  の対数.

### 5.2.2 Finding clusters

$$\tilde{\mathbf{s}} = \begin{pmatrix} 0 \\ \vdots \\ 0 \\ \alpha \ln b \end{pmatrix} \in \mathbb{R}^{k+1}$$

を中心とする球に含まれる格子点の個数を考える.  $a_i$  の部分集合の積で  $b$  が近似できるとき,  $\tilde{\mathbf{s}}$  に近い格子点が存在することを示す.

**補題 5.4**  $\tilde{\mathbf{L}}, \tilde{\mathbf{s}}$  を先の定義のとおりとする. 任意の  $\ell_p$  ノルム, 実数  $\alpha, b \geq 1$ , 正整数  $a_1, \dots, a_k, \mathbf{z} \in \{0, 1\}^k$  について,  $g = \prod_i a_i^{z_i} \in [b, b(1 + 1/\alpha)]$  ならば,

$$\|\tilde{\mathbf{L}}\mathbf{z} - \tilde{\mathbf{s}}\|_p \leq \sqrt[p]{\ln b + 2}$$

が成立する.

**証明** 単に計算による証明なので, 省略. □

$0 < \epsilon < 1$  について  $\alpha = b^{1-\epsilon}$  とすると

1. 補題 5.3 より, 格子点間の最小距離は  $\lambda = \sqrt[p]{2(1-\epsilon)\ln b}$  より大きい.
2. 補題 5.4 より, 区間  $[b, b + b^\epsilon]$  が多数の  $\prod_{i \in S} a_i$  ( $S \subseteq \{1, \dots, k\}$ ) を含めば,  $\tilde{\mathbf{s}}$  から  $\sqrt[p]{\ln b + 2} \approx \lambda / \sqrt[p]{2}$  以内の距離に多数の格子点が存在する.

$a_1, \dots, a_k$  を最初の  $k$  個の奇素数とすれば, 上記 2 の前提条件は,

区間  $[b, b + b^\epsilon]$  が多数の無平方で  $a_k$ -smooth な奇数を含めば

となる. 以下では, この前提条件が, どのような  $k, b$  について成立するかを考える.

**補題 5.5** 任意の実数  $\epsilon \in [0, 1)$ ,  $\mu > 1$  と, 任意の整数  $H \geq 1$  と, 任意の有限集合  $M \subset [1, \mu]$  について,  $b$  が  $M$  から無作為に選択されるとき,

$$\Pr \left[ |[b, b + b^\epsilon] \cap M| < H \right] < \frac{\mu^{1-\epsilon} \cdot H}{\kappa(\epsilon) \cdot |M|}$$

が成立する. ここで  $\kappa(\epsilon) = 1 - 2^{\epsilon-1}$  である.

**証明** 集合  $B$  を以下のように定義する.

$$B = \left\{ b \mid b \in M \wedge |[b, b + b^\epsilon] \cap M| < H \right\}$$

次に示すとおり,  $B$  は  $(H - 1)$  個以下の要素からなる  $K < \mu^{1-\epsilon}/\kappa(\epsilon)$  個の集合に分割できる. したがって,  $b$  が  $M$  から無作為に選択されるとき,

$$\Pr \left[ |[b, b + b^\epsilon] \cap M| < H \right] = \Pr[b \in B] = \frac{|B|}{|M|} < \frac{\mu^{1-\epsilon} \cdot H}{\kappa(\epsilon) \cdot |M|}$$

分割法は以下のとおり.

1.  $[1, \mu]$  を  $[2^m, 2^{m+1})$  に分割.  $m = 0, 1, \dots, \lceil \log_2 \mu \rceil - 1$ .
2. 各  $[2^m, 2^{m+1})$  を大きさ  $2^{\epsilon m}$  の  $2^m/2^{\epsilon m}$  個の区間に分割.

上記 2 で得られる各区間は, ある  $y \leq x^\epsilon$  について  $[x, x + y)$  と表される. したがって, 各区間は  $B$  の元を高々  $H - 1$  個しか含まない (さもないと  $B$  の定義に矛盾). 2 で得られる区間の総数  $K$  について,  $K < \mu^{1-\epsilon}/\kappa(\epsilon)$  が成立することは, 単純な数え上げで確認できる. □

**系 5.6** すべての実数  $0 < \epsilon < 1$  と  $\delta > 0$  に対し、任意の十分大きな整数  $h$  について以下を満たす定数  $c$  が存在する。

$k = h^c$  とし、最初の  $k$  個の奇素数を  $a_1, \dots, a_k$  とする。また、

$$M = \left\{ \prod_{i \in S} a_i \mid S \subset \{1, \dots, k\} \wedge |S| = h \right\}$$

とする。  $b$  が  $M$  から無作為に選択されるとき、

$$\Pr \left[ |[b, b + b^\epsilon) \cap M| < h^{\delta h} \right] < \frac{1}{2^h}$$

が成立する。

**証明**  $\epsilon, \delta$  について、  $c$  を  $c > (1 + \delta) / \epsilon > 1$  なる整数とする。  $\mu = a_k^h$  とすれば、  $M \subset [1, \mu)$ 。また、

$$|M| = \binom{k}{h} = \prod_{i=0}^{h-1} \frac{k-i}{h-i} \geq \prod_{i=0}^{h-1} \frac{k}{h} = \frac{k^h}{h^h} = h^{(c-1)h}$$

である（上の不等号は  $k \geq h$  より）。

$$\Pr \left[ |[b, b + b^\epsilon) \cap M| < h^{\delta h} \right] < \frac{a_k^{(1-\epsilon)h} \cdot h^{\delta h}}{\kappa(\epsilon) \cdot h^{(c-1)h}}$$

素数定理より、  $a_k = O(k \ln k) = O(h^c \ln h)$ 。また、  $\kappa(\epsilon) = 1 - 2^{\epsilon-1}$ 。

$$\begin{aligned} \Pr \left[ |[b, b + b^\epsilon) \cap M| < h^{\delta h} \right] &< \frac{O(h^c \ln h)^{(1-\epsilon)h} \cdot h^{\delta h}}{h^{(c-1)h}} \\ &< \left( \frac{O(\ln h)}{h^{\epsilon c - (1+\delta)}} \right)^h < \frac{1}{2^h} \end{aligned}$$

□

**定理 5.7** すべての実数  $0 < \epsilon < 1$  と  $\delta > 0$  に対し、以下を満たす定数  $c$  が存在する。

- $h$  を十分大きな正整数とし、  $k = h^c$  とする。
- 最初の  $k$  個の奇素数を  $a_1, \dots, a_k$  とする。
- $b$  を  $\{a_1, \dots, a_k\}$  から無作為に選択した  $h$  個の素数の積とする。
- $\alpha = b^{1-\epsilon}$  とし、

$$\tilde{\mathbf{L}} = \begin{pmatrix} \sqrt[p]{\ln a_1} & 0 & 0 \\ 0 & \ddots & 0 \\ 0 & 0 & \sqrt[p]{\ln a_k} \\ \alpha \ln a_1 & \cdots & \alpha \ln a_k \end{pmatrix} \quad \tilde{\mathbf{s}} = \begin{pmatrix} 0 \\ \vdots \\ 0 \\ \alpha \ln b \end{pmatrix}$$

とする。

- $\tilde{r} = \sqrt[p]{(1 + \epsilon) \ln b} > 1$  とする。

このとき

1.  $\mathcal{L}(\tilde{\mathbf{L}})$  のすべての非零ベクトルの  $l_p$  ノルムは  $\sqrt[p]{2 \left(\frac{1-\epsilon}{1+\epsilon}\right)} \tilde{r}$  より大きい.
2. 少なくとも  $1 - 2^{-h}$  の確率で, 球  $\mathcal{B}(\tilde{\mathbf{s}}, \tilde{r})$  に,  $h^{\delta h}$  個以上の格子点  $\tilde{\mathbf{L}}\mathbf{z}$  が含まれる. ただし,  $\mathbf{z} \in \{0, 1\}^k$  で丁度  $h$  個の 1 を持つ.

**証明** 補題 5.3, 補題 5.4, 系 5.6 から直ちに導かれる.

**系 5.8** 任意の  $0 < \gamma < \sqrt{2}$  に対して, 以下を満たす定数  $0 < \epsilon < 1$  が存在する.

任意の十分大きな正整数  $k$  について, 最小距離が  $\lambda$  の階数  $k$  のある格子  $\tilde{\mathbf{L}}$  とある点  $\tilde{\mathbf{s}}$  が存在して, 球  $\mathcal{B}(\tilde{\mathbf{s}}, \lambda/\gamma)$  が  $2^{k^\epsilon}$  個の格子点を含む.

**証明** 定理 5.7 で,  $p = 2$  とし,  $\gamma = \sqrt{2 \left(\frac{1-\epsilon}{1+\epsilon}\right)} < \sqrt{2}$  となるよう  $\epsilon$  を決める. したがって,  $\epsilon = \frac{2-\gamma^2}{2+\gamma^2}$ .

### 5.2.3 Some additional properties

この節の内容は, この本の他の部分では利用されないので, 省略して差し支えない.

**命題 5.9**  $\tilde{\mathbf{L}}$  の行列式は

$$\sqrt{\left(1 + \alpha^2 \sum_{i=1}^k \ln a_i\right) \prod_{i=1}^k \ln a_i}$$

**定義 5.1**  $x$  を任意の (正の) 実数とし,  $p/q$  を有理数とする.  $|p - qx| < \delta$  のとき,  $p/q$  を  $x$  のディオファントス  $\delta$  近似と呼ぶ.

**命題 5.10**  $\alpha > 0, b > 0$  を任意の正の定数とする. 任意の整数ベクトル  $\mathbf{z}$  について,  $\|\tilde{\mathbf{L}}\mathbf{z} - \tilde{\mathbf{s}}\|_1 < \ln b$  ならば,  $\prod a_i^{z_i}$  は  $b$  のディオファントス  $b/\alpha$  近似である.

命題 5.10 は補題 5.4 の逆. 一般の  $l_p$  ノルムについても同様の結果が成立する.

## 5.3 Integer Lattices

$\tilde{\mathbf{L}}$  と  $\tilde{\mathbf{s}}$  の適当な整数近似についても, 前節と同様の結果が得られることを示す.

**補題 5.11** すべての  $\eta \geq 1$  とすべての整数ベクトル  $\mathbf{z} \in \mathbb{Z}^k$  について,

$$\|\mathbf{L}\mathbf{z}\|_p \geq (\eta - 1)k \|\tilde{\mathbf{L}}\mathbf{z}\|_p$$

ここで,  $\mathbf{L} = \lfloor (k\eta)\tilde{\mathbf{L}} \rfloor$  は,  $(k\eta)\tilde{\mathbf{L}}$  の各要素をそれに最も近い整数で置き換えて得られる行列である.

**証明** 単に計算による証明なので省略.

**補題 5.12** すべての  $\eta \geq 0$  とすべての整数ベクトル  $z \in \mathbb{Z}^k$  について,

$$\|\mathbf{L}z - \mathbf{s}\|_p \leq (\eta + 1)k \|\tilde{\mathbf{L}}z - \tilde{\mathbf{s}}\|_p$$

ここで,  $\mathbf{L} = \lfloor (k\eta)\tilde{\mathbf{L}} \rfloor$ ,  $\mathbf{s} = \lfloor (k\eta)\tilde{\mathbf{s}} \rfloor$ .

**証明** 単に計算による証明なので省略.

### 定理 4.5 の証明

**定理 4.5** 任意の  $p \geq 1$ ,  $\gamma \in [1, \sqrt[p]{2})$ ,  $\delta > 0$  について, 整数  $h$  が与えられたとき, 以下を満たす整数  $k, r$ , 行列  $\mathbf{L} \in \mathbb{Z}^{(k+1) \times k}$ , 整数ベクトル  $\mathbf{s} \in \mathbb{Z}^{k+1}$  を出力する確率アルゴリズムが存在する. なお, 時間計算量は  $h$  の多項式である.

1.  $\mathcal{L}(\mathbf{L})$  のすべてのベクトルの  $\ell_p$  ノルムは  $\gamma r$  より大きい.
2. すべての十分大きな  $h$  について, 少なくとも  $1 - 2^{-h}$  の確率で, 球  $\mathcal{B}(\mathbf{s}, r)$  は少なくとも  $h^{\delta h}$  個の格子点  $\mathbf{L}\mathbf{y}$  を含む. ここで,  $\mathbf{y}$  は丁度  $h$  個の 1 を持つ  $\{0, 1\}$  ベクトルである.

**証明** 1 については, 定理 5.7 と補題 5.11 を用いる. 定理 5.7 より,  $k = h^c$  とする. また, 補題 5.11 について,  $\eta = 1/\epsilon$  とし,  $r = \lceil (1 + 1/\epsilon)k\tilde{r} \rceil$  とする. ただし,  $\epsilon$  は定理 5.7 の  $\epsilon$ .

2 については, 定理 5.7 と補題 5.12 を用いる. 1 の場合と同様に, 補題 5.12 について,  $\eta = 1/\epsilon$  とする. □

## 5.4 Deterministic Construction

**予想 1** 任意の  $\epsilon > 0$  に対して, ある  $d$  が存在して, 十分大きなすべての  $n$  について, 区間  $[n, n + n^\epsilon]$  に無平方で  $(\log^d n)$ -smooth な奇数が存在する.

**定理 4.9** 予想 1 が正しければ, 任意の  $p \geq 1$ ,  $\gamma \in [1, \sqrt[p]{2})$  について, 整数  $h$  が与えられたとき, 以下を満たす整数  $k (> h)$ ,  $r$ , 行列  $\mathbf{L} \in \mathbb{Z}^{(k+1) \times k}$ , 整数ベクトル  $\mathbf{s} \in \mathbb{Z}^{k+1}$  を出力する決定性アルゴリズムが存在する. なお, 時間計算量は  $h$  の多項式である.

1.  $\mathcal{L}(\mathbf{L})$  のすべてのベクトルの  $\ell_p$  ノルムは  $\gamma r$  より大きい.
2. 任意の  $\mathbf{x} \in \{0, 1\}^h$  に対して, ある  $\mathbf{y} \in \{0, 1\}^{k-h}$  が存在して,  $\mathbf{L}(\mathbf{y}^T, \mathbf{x}^T)^T$  が球  $\mathcal{B}(\mathbf{s}, r)$  に含まれる.

**証明**  $0 < \epsilon < 1$  を実数とする. 十分大きなすべての  $n$  について, 区間  $[n, n + n^{\epsilon/2}]$  に無平方で  $(\log^d n)$ -smooth な奇数が存在するような整数  $d$  を考える (予想 1).

$k = h^{d+1} + h$  とし,  $a_1, \dots, a_k$  を最初の  $k$  個の奇素数,  $b = a_k^{2h/\epsilon}$ ,  $\alpha = b^{1-\epsilon}$  とする.  $k$  が  $h$  の多項式であることに注意する.

補題 5.3 より, すべての  $z \in \mathbb{Z}^k \setminus \{\mathbf{0}\}$  について

$$\|\tilde{\mathbf{L}}z\|_p \geq \sqrt[p]{2(1-\epsilon) \ln b}$$

が成立する.

以下では, すべての  $\mathbf{x} \in \{0, 1\}^h$  に対して,

$$\left\| \tilde{\mathbf{L}} \begin{pmatrix} \mathbf{y} \\ \mathbf{x} \end{pmatrix} - \tilde{\mathbf{s}} \right\|_p < \sqrt[p]{\ln b + 2}$$

を満たす  $\mathbf{y} \in \{0, 1\}^{h^{d+1}}$  が存在することを示す.

$g_{\mathbf{x}} = \prod_{i=1}^h (a_{h^{d+1}+i})^{x_i}$  とおくと,

$$\frac{b}{g_{\mathbf{x}}} > \frac{b}{a_k^h} = a_k^{(2/\varepsilon-1)h} > 2^h$$

したがって, 十分大きなすべての  $h$  について, 区間  $[b/g_{\mathbf{x}}, b/g_{\mathbf{x}} + (b/g_{\mathbf{x}})^{\varepsilon/2}]$  に無平方で  $\log^d(b/g_{\mathbf{x}})$ -smooth な奇数が存在する. ところで, 素数定理より  $a_k = O(k \ln k)$  なので,

$$\log^d(b/g_{\mathbf{x}}) \leq \log^d b = O(h \log h)^d < h^{d+1}$$

である. したがって, この奇数は, ある  $\mathbf{y} \in \{0, 1\}^{h^{d+1}}$  を用いて,

$$g_{\mathbf{y}} = \prod_{i=1}^{h^{d+1}} a_i^{y_i}$$

と表すことができる.  $g_{\mathbf{y}} \in [b/g_{\mathbf{x}}, b/g_{\mathbf{x}} + (b/g_{\mathbf{x}})^{\varepsilon/2}]$ ,  $g_{\mathbf{x}} \leq a_k^h = b^{\varepsilon/2}$  より,

$$g_{\mathbf{y}} g_{\mathbf{x}} \in [b, b + b^{\varepsilon/2} g_{\mathbf{x}}^{1-\varepsilon/2}] \subset [b, b + b^{\varepsilon}]$$

が成立するので, 補題 5.4 より,

$$\left\| \tilde{\mathbf{L}} \begin{pmatrix} \mathbf{y} \\ \mathbf{x} \end{pmatrix} - \tilde{\mathbf{s}} \right\|_p < \sqrt[p]{\ln b + 2}$$

が成立する.  $r = \sqrt[p]{\ln b + 2}$  として,

$$\frac{\sqrt[p]{2(1-\varepsilon) \ln b}}{r} = \sqrt[p]{2} \left( \frac{(1-\varepsilon) \ln b}{\ln b + 2} \right)^{1/p} > \lambda$$

を満たすように  $\varepsilon$  を選ぶ.  $\mathbf{L}, \mathbf{s}$  は, 補題 5.11 と補題 5.12 を用いて得ることができる.  $\square$

## 5.5 Notes

省略